

## 青年一両親間の葛藤調整過程に関する面接調査

名古屋大学	杉村和美
東京理科大学	竹尾和子
社会技術研究開発センター	山崎瑞紀

### The process of adolescent-parent conflict resolution among Japanese adolescents: Results of the interview research

Nagoya University	SUGIMURA, Kazumi
Tokyo University of Science	TAKEO, Kazuko
Research Institute of Science and Technology for Society	YAMAZAKI, Mizuki

#### 要 約

本研究の目的は、青年-両親間の葛藤場面における青年の行動と意見の伝え方、その背景にある相手への期待、理想と現実の葛藤解決行動の違いを検討することであった。日本人青年 15 名に対して面接調査を実施した。具体的には、父親、母親、友人との仮定の葛藤場面を提示し、その場面において青年がとるであろう行動やその行動に対する相手の反応、理想の行動について回答を求めた。結果は次の通りであった。1) 青年の行動では自己優先が、意見の伝え方では自己主張が多かった。自己優先は 3 パターン、自己主張は 4 パターン見いだされ、自分の欲求を明確に表現する方法と、婉曲的に表現する方法に区別することができた。2) 青年の行動は他者との関係性の文脈に埋め込まれていた。青年は、家庭内では親が許容してくれるという期待を背景にして自分の欲求を明確に主張し、家庭外では関係が壊れるかもしれないという期待を背景にして友人に配慮した自己主張をする可能性が示唆された。

**【キーワード】** 青年期、葛藤、親子関係、友人関係

#### Abstract

This interview research of 15 Japanese adolescents focused on their behaviors, communication approaches, and their parents reactions that they expect to their actions in parent-adolescent conflict scenes, as well as the gap between their ideal and real conflict solution actions. Participants responded to presented hypothetical conflict scenes with a father, a mother, or a friend, telling what would be their actions, the other party's responses to such actions, and their ideal actions. The findings are: 1) Me-first actions and self-assertion approaches were dominant

and respectively categorized into 3 patterns and 4 patterns. Additionally, self-assertion approaches were classified into explicit and indirect expressions of their needs. 2) Adolescents behaviors were embedded in the context of their relationships with the others. This implies that adolescents in their family settings are likely to express their desires explicitly in the expectation that their parents will accept them, while they out of their family settings are likely to assert themselves considering their relationships with their friends in the expectation that their relationships may be deteriorated.

**【Keywords】 adolescence, conflict, parent-child relationships, relationships with friends**

## 問 題

青年期は、親の権威から脱却して自ら行動を律するようになる時期である。青年は、日常生活の諸側面を親の支配によってではなく自分で決定することを求めるため、青年と両親の間に葛藤が生じる。青年-両親間の葛藤の深刻度は青年期前期から中期にかけて高まり (Laursen, Coy, & Collins, 1998), その背後には、親の権威の概念に関する青年と親の食い違いがある (二宮・首藤, 2003; Smetana, 1989)。親子間の葛藤は、青年の自立・自律を理解するための鍵である。加えて、青年の葛藤解決においては、葛藤の場面、相手、深刻度、背景にある価値観といった文脈が重要な役割を果たしている (平井, 2000; 森泉, 2005; 長峰, 1999; Phinney, Kim-Jo, Osorio, & Vilhjalmssdottir, 2005; Takeo, Yamazaki, & Sugimura, 2004)。青年の自立・自律の要求は、そうした文脈に応じてさまざまな形態や意味をとると考えられるので、葛藤解決行動を文脈に位置づけて捉えることが重要である。本研究では、青年-両親間の葛藤解決における青年の行動を、それが生起する文脈とともに理解することを目的とする。具体的な目的は、以下の3つである。

第1の目的は、青年-両親間の葛藤における青年の解決行動、および自己優先行動や自己主張をする際の具体的な伝え方を明らかにすることである。日米の親子関係の違いを論考した Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, & Weisz (2000) によると、日本では、乳児期からの共生的な親子関係が持続するため、青年期になっても両親との間に緊張関係は生じないという。しかし、日本人青年が親との葛藤場面で、親に従うよりも自己を優先したり自己主張を行う傾向のあることが明らかにされつつある (平井, 2000; 森泉, 2005; 山崎・杉村・竹尾, 2002a)。ただし、葛藤の概念や解決は文化によって多様な形態をとるとされていることから (Markus & Lin, 1999; Triandis, 1995), 自己優先や自己主張という表出行動にもさまざまな方法や意味があると考えられる。特に日本人は、自己主張を行う際に慎重な方法を選択する可能性がある。例えば、東 (1994) は、日本の人間関係では、他者の気持ちを察することが重視されると指摘し、これを「気持ち主義」と呼んでいる。そのため、相手を傷つけない自己主張のしかたを考慮すると推測される。そうだとすれば、日本人青年の自立・自律の特徴を理解する上では、自己主張の頻度だけではなく、その方法まで踏み込んで検討することが必要であろう。そこで、本研究ではまず、葛藤解決場面において「青年が実際にとるであろう行動と伝え方」(以下「青年の行動と伝え方」) を検討するとともに、特に自己優先行動と自己主張に注目してさまざまな

パターンを収集する。

第2の目的は、青年の葛藤解決行動がどのような期待に基づいて行われているのかを明らかにすることである。人は一般に、自分の行動の結果や、自分の行動に対する相手の反応を予測しながら行動する。葛藤場面において青年は、自分の行動が相手にどのような影響を及ぼし、どのような結果に至るのかを予測しながら、行動を調整するであろう。本研究では、こうした相手の反応への期待を、「青年の行動に対する相手の反応」および「相手が青年の行動を拒否した場合の青年の気持ちと行動」を通して捉え、これらが青年の葛藤解決行動をどのように規定しているのかを検討する。これまで心理学、とりわけ認知心理学の領域では、一連の反応系列に関する主体の知識の集合体をスクリプトと呼んで、研究が進められてきた。また、東（2005）は、人間関係の出来事の進行に対する予備的な知識を「出来事スクリプト」と呼び、文化による人の行動傾向の違いにスクリプトのレパートリーの違いが関係している可能性があるとして指摘している。本研究では、青年の葛藤解決行動の意味を、青年が予測する相手の反応や、相手に拒否された場合に青年はどうするかといった一連の系列の中に位置づけて理解する。

第3の目的は、葛藤場面における青年の行動と伝え方を「青年が理想とする行動と伝え方」との関係で理解することである。平井（2003）は、葛藤解決においてどうすることが「望ましいか」、「正しいか」といった価値規範を捉えることが、その文化で人々が内在化している行動や関係性の特徴を理解する上で有効であると指摘している。こうした価値レベルの認識は、現実レベルの認識と常に共存しており、密接に結びつき（あるいは分化し）ながら実際の行動を生起させると考えられる。子どもは、社会の担い手である親を通して価値規範を身につけるが、発達とともに具体的な生活の中で、より現実に即した行動のしかたを体得していく。また、青年期には、価値規範を理解する一方で、より主体的な判断に基づいて行動する傾向も高まると思われる。このようなことから、青年の行動の意味を理解する際に、理想の行動と伝え方を捉え、現実との一致・不一致を検討することが有効であると考える。

本研究では、以上3つの目的のいずれを検討する際にも、葛藤の相手による違いに注目する。青年期の葛藤に関する先行研究では、親や友人といった関係の質の違いが葛藤解決のしかたに違いをもたらすことが指摘されているが（Adams & Laursen, 2001; Laursen & Collins, 1994; Laursen et al., 1998）、この問題はとりわけ日本人青年にとっては重要である。日本の親子関係では、家庭内（ウチ）と家庭外（ソト）の振る舞いを区別する社会化が行われる（東, 1994; 土居, 1971）。ウチは遠慮のない身内の世界としてほしいままの振る舞いが許されると認識されるが、ソトでは遠慮を働かせて自分の行為を統制することが求められる。実際、葛藤の相手が親の場合はそれ以外の他者の場合よりも、自己優先行動や一方的な自己主張の頻度が高いことが見いだされている（平井, 2000; 森泉, 2005）。家庭内と家庭外を特徴的な形で区別する日本文化における、2つの場面での振る舞いの分化（あるいは統合）を検討することは、日本人青年の自立・自律を理解する上で意味があると考えられる。さらに、家庭内における父親と母親の役割や機能には質的な違いがあるとされることから（柏木, 1993）、父親と母親も分けて検討する必要があるだろう。そこで本研究では、父親、母親、友人それぞれとの葛藤場面を設定して比較検討する。

## 方 法

### 対象者

東京都および愛知県の 4 年制大学に在籍する日本人大学生 15 名（男性 9 名，女性 6 名）。年齢構成は，18 歳 2 名，19 歳 3 名，20 歳 2 名，21 歳 4 名，22 歳 1 名，23 歳 1 名，25 歳 1 名，27 歳 1 名であった。

### 面接内容

特定の葛藤場面を記述したビネットを作成した。作成にあたっては，青年，とりわけ本研究の対象者である大学生にとって現実性のある場面であること，父親・母親場面と友人場面で葛藤の深刻度をそろえることを考慮した。具体的には，父親・母親場面は，親しい友人との海外旅行を危険との理由で反対される場面，友人場面は，2 人 1 組で行うレポート課題を友人にすべて押し付けられそうになる場面であった。父親・母親場面と友人場面の内容が異なるのは，現実性を優先したためである。

各場면을提示した後，その場面における青年の行動やその行動に対する他者の反応などについて 13 項目にわたって質問し，自由に回答してもらった。その際，青年の関係性についての考え方や期待を把握するため，各項目への回答に加え，その理由についても尋ねた。面接内容の詳細については，付録に示した。

また，各場面の現実性と深刻度について確認するため，対象者に，それぞれ「まったく現実性がない(1)」～「非常に現実性がある(5)」，「まったく深刻でない(1)」～「非常に深刻である(5)」の 5 件法で回答を求めた。平均値は，現実性については父親場面 2.67，母親場面 2.93，友人場面 3.47，深刻度についてはそれぞれ 3.60，3.73，3.00 であった。

### 手続き

対象者の募集と面接の実施は，著者らが行った。授業で調査について説明し，参加を希望した学生に個別に連絡を取って調査の日時を設定した。そして，面接者と対象者の 1 対 1 の半構造化面接を実施した。面接の所要時間は，1 時間程度であった。面接内容は対象者の了解を得て録音され，逐語録が作成された。調査時期は，2004 年 11 月であった。

### 分析方法

まず著者らの 1 名が発話データを意味内容のまとまりに区切って，カテゴリと定義を作成し，この分類基準に基づきデータを分類した。次に別の 1 名が，作成された分類基準とデータを照合し，分類基準の妥当性と分類を確認した。さらに，3 名で協議してカテゴリを統合・削除するなどして，最終的な分類基準と分類を決定した。

## 結 果

### 青年の行動と伝え方

行動と伝え方ともに，さまざまなカテゴリが見いだされた。場面別の青年と行動と伝え方のカテゴリ，定義，回答例，頻度を，表 1 に示した。

表1 場面別の青年の行動と伝え方

	カテゴリー	定義	回答例	頻度			
				父親	母親	友人	合計
行動	自己優先	自分の欲求を通す、またはそのための行動をとる		10	9	2	21
	自己優先 (説得的)	その際、相手を説得する行動が見られる	説得する (202 父)	7	7	0	14
	自己優先 (直接的)	その際、直接的に自分の意思を伝える	意思をひたすら伝える (101 父)	3	0	2	5
	自己優先 (感情アピール)	その際、相手の感情に訴える	感情に訴える (101 母)	0	2	0	2
	ネゴシエーション	互いに譲歩し合う方向で話し合う	フェアになるようにやろうと言う (309 友)	1	2	12	15
	相手の理由や意見を聞く	相手に理由を質問したり、意見を聞いたりする	何で反対するのかをもっと明確にしてもらう (308 母)	6	3	1	10
	他者優先	相手の言うことに従う	自分でやっちゃう気がする (104 友)	1	1	3	5
伝え方	自己主張			18	15	18	51
	説明的自己主張	理由や客観的な事柄を持ち出して自分の欲求を通そうとする	安全性を論理的にアピールする (301 父)	10	8	6	24
	直接的自己主張	相手の申し出をはっきり断ったり、自分の主張を直接言ったりする	ストレートに言う (306 友)	7	6	6	19
	間接的自己主張	疑問形や冗談、笑いをを用いることで相手の申し出を曖昧に断る	遠回しに言うなり、冗談なりを混ぜて当たり障りのないように言う (304 友)	0	0	6	6
	他者依存型自己主張	他者に責任をかぶせて自分の責任を回避し、自己主張する	誰々ちゃんと誰々ちゃんは行くんだけど (101 母)	1	1	0	2
	相手の理由や意見を聞く	相手に理由を質問したり、意見を聞いたりする	なぜ行っってはいけないのか理由を聞く (305 父)	2	2	0	4
	他者優先	自分の気持ちを伝えないとか、相手の意向に従うことを伝える	たぶん (自分の気持ちを) 伝えない (101 友)	0	0	1	1

注) 反応例のかつこ内は、対象者番号と場面を示す。頻度は重複回答も含む。

**全体的傾向：**行動では「自己優先」が最も多く、「ネゴシエーション」と「相手の理由や意見を聞く」がそれに続いた。「他者優先」は最も少なかった。伝え方では「自己主張」が最も多く、その他のカテゴリーは少数であった。行動の「自己優先」と伝え方の「自己主張」には、さまざまな下位カテゴリーが見いだされた。具体的には行動では、「説得する」「危なくないよ、もう大学生だから大丈夫と言う」といった「自己優先 (説得的)」や、「意思をひたすら伝える」「行きたいと説き伏せる」といった「自己優先 (直接的)」が見られた。また伝え方では、「安全性を論理的にアピールする」「まず自分が行く場所について説明し、その後行く人がどんな人が説明して別に危なくない事を言う」といった「説明的自己主張」や、「ストレートに言う」「行きたい、行きたい、と言う」といった「直接的自己主張」が見られた。これらの行動と伝え方は、自分の欲求をストレートに提示する表出行動である。これに対して、ストレートな表現を避けた表出行動も見いだされた。具体的には行動では、「感情に訴える」「駄々をこねる」といった「自己優先 (感情アピール)」が見られた。伝え方でも、「遠回しに言うなり、冗談なりを混ぜて当たり障りのないように言う」「楽しそうな感じで誘いかける」

といった「間接的自己主張」や、「誰々ちゃんと誰々ちゃんは行くんだけど」といった「他者依存型自己主張」が見られた。

以上のように、自己優先行動として3つのパターン、自己主張の方法として4つのパターンを見いだすことができた。また、そうした自分の欲求を通すための行動や伝え方には、欲求を明確に表現するものだけではなく、婉曲的なものもあることが分かった。

**場面による違い**：行動の「自己優先」は父親・母親場面が友人場面より多く、頻度は少ないものの「他者優先」はその逆であった。下位カテゴリー別では、行動の「自己優先（説得的）」が父親・母親場面のみで見られ、伝え方の「間接的自己主張」が友人場面のみで見られた。行動の「自己優先（感情アピール）」は母親場面のみで見られるなど、父親と母親に対して異なる振る舞いをしていた。これらのことから、青年は、家庭外に比べて家庭内で自分の欲求を通したり、それをストレートに伝えることが示唆された。

**理由**：理由についてもさまざまなカテゴリーが見いだされたが、ここでは頻度の多かったものに絞り、行動のどのカテゴリーと対応しているかを見してみる。理由の結果の詳細については、筆者らに問い合わせられたい。行動の理由としては、自己の欲求を優先させたいからといった「自己優先」（16件、件数は重複回答も含む）が最も多く、主に「自己優先」の理由として報告された。次に多かったのは、相手の意見も取り入れて判断したいからといった「情報収集」（8件）で、主に「相手の理由や意見を聞く」の理由として報告された。さらに、自分だけ負担が大きくなるのを避けたいからという「不公平感」（7件）が続いていた。これは、友人場面に特有のカテゴリーで、主に「ネゴシエーション」の理由として報告された。伝え方の理由としては、相手が許容してくれることを期待する「許容の期待」（15件）が最も多く、主に父親・母親場面での「説明的自己主張」「直接的自己主張」「他者依存型自己主張」の理由として報告された。続いて、気まづくなったり関係を壊したくないからという「関係維持」（10件）が多く、主に友人場面での「間接的自己主張」の理由として報告された。

まとめると、行動の自己優先の理由は自己優先であることが多いのに対して、伝え方の自己主張の理由は必ずしもそうではなかった。むしろ伝え方は、家庭内では許容の期待、家庭外では関係維持という異なる理由に基づいて選択されていた。

#### 相手の反応および相手が拒否した場合の青年の気持ちと行動

場面別の青年の行動に対する相手の反応、相手が青年の行動を拒否した場合の青年の気持ちと行動に関するカテゴリー、定義、回答例、頻度を、表2に示した。

**全体的傾向**：青年の行動に対する相手の反応については、「受容・許可」が最も多く、「否定」がそれに続いた。相手が青年の行動を拒否した場合の青年の気持ちについては、「否定的感情」、とりわけ「相手に対する否定的感情」が最も多かった。拒否した相手の事情に対する「思いやり」も見られた。相手が青年の行動を拒否した場合の青年の行動については、「諦め」といった「他者優先」と「自己優先」が同じ程度に報告された。

表2 場面別の青年の行動に対する相手の反応、青年の行動を相手が拒否した場合の青年の気持ちと行動

カテゴリー	定義	回答例	頻度				
			父 親	母 親	友 人	合 計	
相手の 反応	受容・許可	青年の希望を受容してくれる、あるいは許してくれる	「そんなに言うなら」という感じになる (105 父)	7	4	13	24
	否定	青年の欲求を否定する		7	7	4	18
	否定 (説明的)	その際、理由について言語的な説明をする	理由を言って説得してくる (103 母)	3	4	0	7
	否定 (直接的)	その際、理由について十分な言語的な説明はない (一方的)	(自分が課題を) 押しつけられる (201 友)	4	1	4	9
	否定 (間接的)	その際、間接的な表現や態度によって否定を示す	口では自由に行きなさいと言うけど、仕草や行動から危険なことはしてほしくない (と伝えてくる) (102 母)	0	1	0	1
	否定 (その他)	否定であるが、他のカテゴリーに含まれないもの	大げさに言ってくる (309 母)	0	1	0	1
	他方の親に相談 (他者依存)	父の場合は母に、母の場合は父に聞く、あるいは青年にそうするように促す	お母さんは多分すぐお父さんに相談する (101 母)	1	4	0	5
相手の理由や意見を聞く	話し合いをしようとする	話し合いになる (304 父)	1	0	0	1	
青年の 気持ち	否定的感情	相手に対する否定的な感情を持つ		10	10	16	36
	相手に対する 否定的感情	怒り、驚き、不快感、納得できない、不満などの相手に対する否定的感情	「くそ」って思う (101 父)	8	9	13	30
	失望感	がっかりする、暗い気分になるなどの失望感	2 人の溝みたいなものを感じる (102 友)	2	1	3	6
	思いやり	相手の主張や事情を配慮する感情を持つ		3	3	1	7
	受容・理解	相手の主張を受容する気持ち	心配して行ってくれてるのは分るから、しょうがないかなって (思う) (103 母)	3	3	0	6
	相手の事情への 関心・配慮	相手に何か理由があるのではないかと疑問に思う気持ち	何か問題でも抱えているのかなあ (と思う) (304 友)	0	0	1	1
	葛藤	どうしたらいいか途方にくれる、困るなどの感情	困ったなと (思う) (303 父)	2	1	0	3
自己優先継続	自分の欲求を依然として持ち続ける、あるいはそれを実現しようと模索する	まだまだ望みはある (思う) (101 母)	0	2	0	2	
青年の 行動	他者優先	相手の言うことに従う		5	6	8	19
	諦め	自分自身の欲求を諦める	諦めて (自分で) うまく課題をやる (202 友)	5	5	8	18
	引く	いったん引く	とりあえずいったん引きますね (307 母)	0	1	0	1
	自己優先	自分の欲求を通す、またはそのための行動をとる		9	6	2	17
	自己優先	自分の考えや欲求を優先する	反対されても「どうしてダメなの」とまだ言う (201 父)	5	3	2	10
	感情表出	自分自身の感情を表出する	反発する、(感情を) 表に出すと思う (308 父)	4	3	0	7
	関係拒否	もう相手とは関わらない、付き合わない	課題を1人でやって、2人の関係のことは諦めて、その後も付き合いはない (102 友)	0	0	3	3
	状況による	相手の説得力や問題の重要さなどの状況による	どのくらい (自分が) 行きたくないかによる (104 父)	2	1	0	3
	ネゴシエーション	再び話し合う	後日もう1回話し合いをする (104 母)	1	1	0	2

以上のように、相手の反応から拒否された場合の行動までの一連の過程については、大きく 2 つの категорияに分かれる結果となった。すなわち、相手の反応に関する青年の予測は、「受容・許可」と「否定」という categoria、相手が青年の行動を拒否したと想定させると、気持ちとしては相手への「否定的感情」と「思いやり」、行動としては「他者優先」と「自己優先」という categoriaに分かれた。

**場面による違い**：相手の反応における「受容・許可」は、父親・母親場面に比べて友人場面で多く見られた。これに対して「否定」は父親・母親場面の方が目立っていた。「否定」の下位 categoria別では、「否定（説明的）」は父親・母親場面のみで見られ、友人場面では見られなかった。「他方の親に相談（他者依存）」は、母親場面で目立っていた。

相手が拒否した場合の青年の気持ちでは、下位 categoriaの「思いやり」が父親・母親場面のみで見られ、友人場面では見られなかった。相手が拒否した場合の青年の行動については、「自己優先」が友人場面より父親・母親場面で目立っていた。また、「関係拒否」が友人場面だけで見られた。

まとめると、父親・母親場面では、相手に否定される、とりわけ言語的な説明によって否定されると予測したり、相手を思いやる気持ちを持ったりするものの、結局は自己優先に至るという過程が見られた。友人場面では、相手は受け入れてくれるだろうと予測し、それでも拒否されるならば、関係を解消するという過程が見られた。また、母親場面で他方の親に相談するという反応が見られたことも特徴的であった。

**理由**：相手の反応の理由としては、相手の性格や習慣によるものとする「行動傾向」（14 件）が最も多かった。続く categoriaの頻度は少数であったが、場面による相違が見られた。具体的には、自分の希望を理解してくれるからという「受容・信頼・尊重」（6 件）と、自分の安全を気遣っているからといった「心配」（5 件）は父親・母親場面のみ、関係を悪化させたくないなどの「関係性重視」（4 件）は友人場面のみ、父親が絶対だからなど「父の権威」（3 件）は母親場面のみで報告された。

相手に拒否された場合の気持ちの理由は、自分の考えや気持ちを理解してもらえないからという「相手への否定」（13 件）と、相手の事情や関係を配慮すべきだからという「配慮」（10 件）の大きく 2 つに分かれた。相手に拒否された場合の行動の理由も大きく 2 つに分かれ、これ以上は相手に従うしかないからといった「他者欲求重視」（21 件）が多く、続いて相手の意見には問題があるからなど「相手への批判意識」（10 件）が報告された。

まとめると、相手の反応を予測する際には、相手の日頃の行動傾向が参照されていた。加えて、父親・母親場面では、情緒的なつながりを理由にする categoriaが報告されたのに対して、友人場面では関係性そのものへの配慮を理由とするものが報告されるという違いが見られた。

### 青年が理想とする行動と伝え方

場面別の青年が理想とする行動と伝え方の categoria、定義、回答例、頻度を、表 3 に示した。理想の行動と伝え方ともに、現実のそれらとほぼ同様の categoriaが見いだされた。しかし、現実では報告されたが理想では報告されなかった categoriaがあったり、頻度にやや違いが見られたりした。ここでは、現実の行動と伝え方の結果を比較しながら結果を述べる。



表3 場面別の青年が理想とする行動と伝え方

カテゴリー	定義	回答例	頻度				
			父 親	母 親	友 人	合 計	
理想の 行動	ネゴシエーション		6	6	8	20	
	ネゴシエーション（話し合う）	自分の意見を主張して話し合う	話し合う（103父）	3	4	2	9
	ネゴシエーション（他者配慮を伴う）	自分の欲求を通す、またはそのための行動をとる一方で、相手の意見を聞く、相手の意向を尊重する、相手の了承をとる 相手の相手のやる気を引き出すなどの配慮も行う	相手がやりたいと思うものをピックアップさせて、その人にやる気を起こさせる（309友）	3	2	4	9
	ネゴシエーション（作業量半分）	作業量が半分になるように協力する（説得という行動には言及しない）	半分ずつなり、互いに協力してやる（304友）	0	0	2	2
	自己優先	自分の欲求を通す、またはそのための行動をとる		6	7	3	16
	自己優先（説得的）	その際、相手を説得する行動が見られる	自分のしたいこととか、本音の部分をちゃんと伝える（102母）	5	5	3	13
	自己優先（直接的）	その際、直接的に自分の意思を伝える	行く（305父）	1	2	0	3
	他者優先	相手の欲求を受け入れる	言うことを聞く（201父）	2	2	0	4
	理想の 伝え方	自己主張		7	6	9	22
説明的自己主張		自分の意見を主張するときに、根拠を述べる（根拠として相手にとっての利点を述べる場合もある）	真剣に2人でいるところで説得する。資料とか論理的に（104母）	5	5	4	14
直接的自己主張		自分の欲求をストレートに、はっきりと伝える	そのまんま言う、「行きたい」とか（303父）	2	1	3	6
間接的自己主張		冗談などを用いて、曖昧に断る	遠回しに、冗談を交えて、当たり障りのないように（304友）	0	0	2	2
相手の意見や理由を聞く				6	5	2	13
調整型自己主張（ネゴシエーション）		相手と調整しながら、自分の欲求を通す方向へ持っていく	なるべく機嫌を損ねないように、「美味しいもの買ってくるから」とか（201母）	2	3	0	5
他者配慮型自己主張（ネゴシエーション）		まず自分の意見を主張してから相手の意見も聞く、または相手の意見も認識していることを示す	まず自分の意見を言ってから、どうして反対するのか聞く（202父）	2	1	0	3
理由質問		まず相手の意見や理由を聞いたり、真意を確かめるようなことを言う	理由があってできないんだたら私がやるから、ちゃんと教えて（103友）	2	1	2	5
他者優先		相手の意向に従うことを伝える	分かったから行くのやめるよ（201父）	1	1	0	2
理想と 現実の ずれ		ずれはない		7	7	5	19
	現実自己重視・理想は相互性重視	理想より現実の方が自己の欲求を通す方向性が明確である		7	5	2	14
	感情抑制不能	その理由として、現実では冷静になれず、自分の欲求や感情が抑制できないことに言及	頭では冷静に伝えるのがいいと分かっているけど、最初からだめと言われたら不満が出て、その気持ちの方が先に出る（103父）	5	2	2	9
	許容期待	その理由として、現実では相手の許容が期待できることに言及	（現実では）母親は同性だから、何も言わなくても理解してくれるだろうっていう甘えがあると思う（310母）	2	3	0	5
	現実自己重視・理想は相互性重視（関係性重視）	現実より理想の方が自己の欲求を通す方向性が明確で、その理由として、現実には相手との関係性が重要であることに言及	自分の意志を伝えてその上で付き合いたい。でも実際は争いを犯してまでというより、関係が表面的でも続く方がいいから（102友）	0	2	4	6

**全体的傾向：**理想の行動では、「ネゴシエーション」が最も多く、「自己優先」がそれに続いた。現実の行動とは逆の傾向であった。下位カテゴリー別に見てみると、「ネゴシエーション」については、「話し合う」「他者配慮を伴う」「作業量半分」といった下位カテゴリーがあり、現実の行動よりもさまざまなバリエーションが見いだされた。「自己優先」では、「自己優先（説得的）」「自己優先（直接的）」は現実と同様であったが、現実で報告された「自己優先（感情アピール）」は、理想では見られなかった。

理想の伝え方では、「自己主張」が最も多く、「相手の意見や理由を聞く」がそれに続いた。下位カテゴリー別に見てみると、「自己主張」のうち、現実の伝え方で報告された「他者依存型自己主張」が理想では見られなかった。他の下位カテゴリーは現実と同様であった。「相手の意見や理由を聞く」については現実よりも頻度が高いほか、「調整型自己主張」「他者配慮型自己主張」「理由質問」といった多様な下位カテゴリーが見いだされた。

**場面による違い：**理想の行動のうち「自己優先」は、友人場面より父親・母親場面で多かったが、その傾向は現実よりも弱かった。理想の伝え方のうち、友人場面でのみ現実と同様に「間接的自己主張」が見られた。「相手の意見や理由を聞く」は、父親・母親場面の方が友人場面より多い傾向があった。これは現実と同様であったが、その傾向は理想の方が強まっていた。まとめると、家庭外に比べて家庭内で自分の欲求を通したり、それをストレートに伝える傾向はあったものの、現実の行動や伝え方に比べると顕著ではなかった。

**理由：**理想の行動の理由としては、「他者への配慮」「関係維持」（ともに8件）が最も多く、「自己優先」（7件）、「他者の意見を参照」（6件）、「その他」（6件）と続いた。現実の行動の理由では、「自己優先」が多かったのとは異なり、理想では、他者や関係を考慮する傾向が高くなっていた。理想の伝え方の理由としては、「方略重視」（15件）が最も多く、「他者配慮重視」（9件）、「直接性重視」（7件）、「関係性重視」（5件）、「その他」（5件）と続いた。現実では、父親・母親場面では「許容の期待」、友人場面では「関係維持」が目立っていたが、理想では効果的に伝えるためという「方略重視」の理由が最も多く報告された。このように、現実とは異なり理想では、他者や関係への配慮や、伝える方略の重視といった傾向が見られた。

**現実と理想のずれとその理由：**回答は「ずれはない」（19件）と、ずれがあるという報告（20件）に二分された。ずれの方向としては、「現実自己重視・理想相互性重視」（14件）が「現実相互性重視・理想自己重視」（6件）を上回っていた。その理由としては、「感情抑制不能」（9件）と、父親・母親場面のみで「許容の期待」（5件）が報告された。このように、現実の行動や伝え方のうち父親・母親場面では感情の抑制ができなかったり、許容を期待して、自己重視になりがちだと認識されていた。

## 考 察

### 青年の行動と伝え方

全体として、青年の現実の行動においては「自己優先」が、伝え方においては「自己主張」が多か

った。これは、大学生における青年-両親間の葛藤解決行動を検討した山崎他（2002a）と同じ傾向である。これに加えて本研究では、自己優先と自己主張の多様なカテゴリーが見いだされた。自分の欲求をストレートに提示する表出行動だけではなく、婉曲的に提示する表出行動も見いだされたことから、青年が幅広い表出行動のレパートリーを持つことが分かる。

これを理由の結果と合わせて検討すると、重要な示唆が見えてくる。つまり、これらの表出行動が、どのような関係性の期待の中に埋め込まれているかである。文化による葛藤解決の違いに関する論考からは（Markus & Lin, 1999; Triandis, 1995）、自分の欲求をストレートに提示する表出行動は、相互独立的な価値観を重んずる欧米の青年に見られる自己主張として理解され、相手の感情に訴えたり、ストレートな表現を避けた表出行動は、相互依存的な価値観を背景とした行動や伝え方と解釈され得る。しかし、本研究においては、自己優先行動の背景には自己優先の理由があったが、自己主張の伝え方の背景には必ずしも自己優先の理由があるわけではなかった。具体的には、婉曲的な伝え方である「間接的自己主張」「他者依存型自己主張」のみならず、ストレートな伝え方である「直接的自己主張」「説明的自己主張」においても、その理由は必ずしも自己優先ではなく、むしろ「許容の期待」や「関係維持」の理由が多かった。これらの結果は、青年は、自己の欲求だけではなく相手との関係性を考慮して欲求の伝え方を工夫していることを示唆する。このことから、先に述べた二分法での理解は、必ずしも妥当ではない可能性が出て来る。一見、相互独立的な行動と見られる自己主張であっても、その背景を含めて考えれば、むしろ相手のことを配慮した結果としての自己主張の可能性がある。行動だけを切り離して相互独立的か相互依存的かを結論づけるのではなく、その行動を、背景となる理由や状況に埋め込まれたものとして理解する必要性を意味する。

場面による違いも見られた。具体的には、自己の欲求をストレートに伝える表出行動は父親・母親場面でやや目立っており、間接的に伝える表出行動は友人場面のみで見られた。このことは、青年は家庭内では直接的な表現をとるのに対して、家庭外ではそれを避ける傾向があることを意味する。ウチとソトの区別に関する理論と一致する結果であった（東, 1994; 土居, 1971）。伝え方の理由に関する結果からは、このような区別の背景に、家庭内と家庭外で異なる関係性の期待のあることがうかがわれる。「許容の期待」は主に父親・母親場面で、「関係維持」は主に友人場面で報告された。家庭内では許容の期待に基づいて直接的に表現するが、家庭外ではそのようなことをすれば関係を損なう可能性があるために、関係維持を可能にする婉曲的な伝え方が選択されるのではないだろうか。

さらに、父親場面と母親場面にも違いがあり、自分の欲求を通す際に相手の感情に訴える行動は、母親場面のみで見られた。一般に、青年にとって母親は父親よりも近い存在として認識されるが（Coleman & Hendry, 1999）、とりわけ日本の母子関係における情緒的な結びつきは、欧米より強いと指摘されている（東・柏木・ヘス, 1981; 柏木, 1993）。このことが葛藤解決行動に反映されているのかもしれない。ただし、近年の日本では、母親の就労や父親の育児参加などにより、家庭内のコミュニケーションが変化している（伊藤, 2000; 柏木, 1993）。こうした変化が今後、青年の父親と母親に対する自己主張のしかたの違いに影響を与える可能性もあるだろう。

#### 相手の反応および相手が拒否した場合の青年の気持ちと行動

青年の行動に対する相手の反応として、「受容・許可」と「否定」という2つの予測が見いだされ

た。これを場面別に見ると、父親・母親場面における特徴が見えてくる。父親・母親場面では、親が自分の行動を「受容・許可」とすると予測する青年がいる一方で、友人場面では見られなかった「否定（説明的）」によって禁止されると予測する青年がいた。「否定（説明的）」という下位カテゴリーは、言語的に明確な表現方法なので、両者の対立を浮き彫りにする可能性がある。そのような反応を予想しながら自己優先行動をとる場合には、背景に親子間の情緒的結びつきや（山崎・杉村・竹尾，2002b），一時的な対立があってもそれが両者の関係に決定的な亀裂をもたらすことはないという関係性の認識があるのかもしれない。これに対して友人場面では、最終的には「関係拒否」に至るという報告が見られたことや、理由において「関係性重視」が見られたことから、親子関係と違い友人関係の亀裂は修復が難しいという認識があるのかもしれない。

このように、青年は家庭内と家庭外で異なる関係性の期待を持ち、それに基づいて家庭内では自分の欲求をストレートに表出し、家庭外では婉曲的に表出する方向で行動を調整している可能性がある。Laursenらは青年期の葛藤に関するレビューや実証研究を通して、対人関係には、容易には壊れずに維持される親などとの関係と、流動的で変容しやすい仲間などとの関係があり、葛藤解決にもこの違いが反映されると指摘している（Adams & Laursen, 2001; Laursen & Collins, 1994; Laursen et al., 1998）。本研究の結果は米国人青年におけるこうした傾向と一貫するよう見えるが、親および友人との関係性の違いと日本文化におけるウチとソトといった問題との関係については、さらに検討する必要があるだろう。

この他、相手の反応のうち「他方の親に相談（他者依存）」は、母親場面で目立っていた。家庭内でのオピニオンリーダーが父親であることが反映された結果と考えられる（柏木，1993）。このことは、家庭における青年の自己主張のあり方は、どちらかの親との二者関係で捉えるだけでなく、家族システム全体から捉える必要があることを示唆する。

### 青年が理想とする行動と伝え方

現実とは異なり理想の行動においては、「自己優先」より「ネゴシエーション」の頻度が高く、場面による違いも見られなかった。「ネゴシエーション」や「相手の理由や意見を聞く」のバリエーションも、現実より多かった。青年、とりわけ大学生にとっては、両親と友人のいずれに対しても、相手の意見を聞く態度が重視されているといえる。理由において、理想では現実より他者や関係への配慮が目立っていたことから、青年が自己と他者の両方を重視していることが分かる。

理想の伝え方においては、現実と同様に友人場面のみで「間接的自己主張」が見られた。他方、「相手の意見や理由を聞く」が、友人場面より父親・母親場面で多く、その傾向は理想の方が強まっていた。これらのことから、青年は現実と同様に家庭内と家庭外の区別を認識しつつも、家庭内で一方的に主張するのではなく、親の意見も聞くべきと考えていることが示唆される。さらに、現実では見られた「他者依存型自己主張」が理想では見られなかった。他者を持ち出して親の共感を引き出すという伝え方は、現実に行っているものの、価値観のレベルでは必ずしも望ましいとは捉えられていないのかもしれない。

理由の結果でも、冷静に方略を考えたり、他者への配慮を行うことが重要であると認識されていた。家庭内と家庭外の区別は行うが、家庭内で許容や共感を期待して自己の欲求を通すという方略を、青

年は必ずしも望ましいとは考えていないのではないだろうか。

以上のように、青年は家庭内と家庭外のいずれの人間関係においても、自分だけが主張するのではなく相手の意見も聞くことを理想としているようである。しかし、家庭外ではその価値規範に沿う方向で行動を調整しているものの、家庭内では、親からの許容や共感を前提として自分の行動を調整している、すなわち価値規範から逸脱して行動する可能性がある。

さらに、理想と現実にはずれのない場合とある場合と、両方見られた。この結果は、内在化された価値規範が実際の行動を規定している場合もあれば、そうではない場合もあることを意味する。後者の場合、文化に対する心の主体性（平井、2003）を示唆するとも考えられる。特に青年期は、親を通して身につけた価値規範からいったん離れ、さまざまな他者や現実の社会との関係との経験を通して、自分なりの行動パターンを形成する時期である。例えば山本他（2005）は、購買行動に関する子どもの善悪判断（正しいか間違っているか）と許容度判断（許されるか否か）を検討し、年齢とともに善悪判断と許容度判断が分化することを見いだした。そして、許容度のような現実認識が善悪といった価値規範から分化する過程が親からの自立の過程であると示唆した。理想と現実のずれは、このような発達的变化を意味しているのかもしれない。

### 結論と今後の課題

本研究では、まず、自己優先行動と自己主張の伝え方の具体的なパターンを提出することができた。先行研究では、これらはあまり詳細に分類されていなかったので（平井、2000；森泉、2005；山崎他、2002a）、青年の幅広い行動レパートリーを明らかにすることができたといえる。また、青年の行動を、相手の反応への期待や価値規範、さらに家庭内と家庭外の違いとの関連で検討することで、自己優先的あるいは自己主張的な行動が、他者との関係性の文脈に埋め込まれていることが明らかになった。具体的には、家庭内では、青年は自己主張し親は否定するといったように双方が自分の欲求を主張するものの、その背景には、そうした率直なやりとりをしても関係が崩れることはないという信念（許容の期待）があること、家庭外では、相手（友人）に配慮した自己主張をしており、その背景には関係が流動的であるという捉え方のあることが、理由の分析より示唆された。

本研究にはいくつかの限界がある。第1に、父親・母親場面と友人場面の現実性および深刻度に違いがあったことである。そのため、今回見いだされた家庭内と家庭外の相違に関する結果は暫定的である。今後は、親や友人との間で青年が経験する葛藤場面を幅広く収集するなどして、共通の場面を設定する必要がある。第2に、今回の調査の対象者が少人数であったことである。より大規模な調査によって、今回収集された様々な自己主張について確認するとともに、葛藤場面、文化、価値観、年齢といった背景要因とどのように関連しているのかを検討する必要がある。第3に、今回は、現実の行動と相手の反応に関する結果を別々に分析している。葛藤調整過程をより深く理解するためには、行動から相手の反応を経て、最終的にどういう結論に至るかについての個人内の反応系列を検討する必要がある。

日本人青年の自己主張のあり方や発達を検討することは、彼らの自立・自律や自己、自我の発達の特徴を理解するための有効な切り口である。本研究を出発点として、比較文化研究も含むより綿密な検討を展開していきたい。

## 引用文献

- Adams R., & Laursen, B. (2001). The organization and dynamics of adolescent conflict with parents and friends. *Journal of Marriage and Family*, 63, 97-110.
- 東 洋. (1994). 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて. 東京：東京大学出版会.
- 東 洋. (2005). スクリプト比較研究の文化心理学的位置づけ. 発達研究, 19, 1-12.
- 東 洋・柏木恵子・R. D. ヘス. (1981). 母親の態度・行動と子どもの知的発達：日米比較研究. 東京：東京大学出版会.
- Coleman, J. C., & Hendry, L. B. (1999). *The nature of adolescence* (3rd ed.). London: Routledge.
- (白井利明他 (訳) (2003) 青年期の本質 京都：ミネルヴァ書房)
- 土居健郎. (1971). 「甘え」の構造. 東京：弘文堂.
- 平井美佳. (2000). 問題解決場面における自己と他者の調整. *教育心理学研究*, 48, 462-472.
- 平井美佳. (2003). 友達関係における文化：ジレンマ課題と友情概念の検討. *心理学研究*, 74, 327-335.
- 伊藤裕子. (2000). ジェンダーの発達心理学. 京都：ミネルヴァ書房.
- 柏木恵子. (1993). 父親の発達心理学. 東京：川島書店.
- Laursen, B., & Collins, A. (1994). Interpersonal conflict during adolescence. *Psychological Bulletin*, 115, 197-209.
- Laursen, B. Coy, K. C., & Collins, W. A. (1998). Reconsidering changes in parent-child conflicts across adolescence: A meta-analysis. *Child Development*, 69, 817-832.
- Markus, H., & Lin, L. (1999). Conflictways: Cultural diversity in the meanings and practices of conflict. In D. Prentice & D. Miller (Eds.), *Cultural divides: Understanding and overcoming group conflict* (pp. 302-333). New York: Russell Sage Foundation.
- 森泉 哲. (2005). 対人関係の違いが自己主張性方略に及ぼす影響. *日本社会心理学会第46回大会発表論文集*.
- 長峰伸治. (1999). 青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究：対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討. *教育心理学研究*, 47, 218-228.
- 二宮克美・首藤敏元. (2003). 変化しつつある社会における子供の生き方の形成：個人道徳の発達を中心として. 平成12年度～平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書.
- Phinney, J. S., Kim-Jo, T., Osorio, S., & Vilhjalmssdottir, P. (2005). Autonomy and relatedness in adolescent-parent disagreements. *Journal of Adolescent Research*, 20, 8-39.
- Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J. (2000). The development of close relationships in Japan and the United States: Paths of symbiotic harmony and generative tension. *Child Development*, 71, 1121-1476.
- Smetana, J. (1989). Adolescents' and parents' reasoning about actual family conflict. *Child Development*, 60, 1052-1067.

- Takeo, K., Yamazaki, M., & Sugimura, K. (2004, August). *Self-assertion among Japanese adolescents as a solution for disagreements with their parents (2): Situational differences*. Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, Beijing, China.
- Triandis, H. C. (1995) *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press. (神山貴弥・藤原武弘(訳) (2002) *個人主義と集団主義：2つのレンズを通して読み解く文化* 京都：北大路書房)
- 山本登志哉・片成男・佐藤達哉・高橋登・竹尾和子. (2005). 日本与韓国児童在自立過程中的文化特点：從圍繞零花錢的親子關係分析自我的結構. *中国心理学会第10届全国心理学会學術會議文摘選集*, 395.
- 山崎瑞紀・杉村和美・竹尾和子. (2002a). 青年-両親間の不一致の解決に関する発達の検討(1)：大学生について. *日本教育心理学会第44回総会発表論文集*, 124.
- 山崎瑞紀・杉村和美・竹尾和子. (2002b). 「親子関係の親密さ」尺度の構成, 及び発達差の検討：日本的相互協調性の視点から. *日本青年心理学会第10回大会発表論文集*, 76-79.

## 付録：面接内容

### 場面

教示：この3枚のカードには、1枚1枚、違った場面が描かれています。それをよく読んで、自分がその場面にいると想像してください。そして、私がお尋ねする質問に対して、あなたならどうするか、どう考えるか、できるだけありのままに、具体的にお答え下さい。

父親・母親場面：あなたは今度の休暇に、親しい友人たちと海外旅行に行くことになりました。あなたはその旅行にぜひ行きたいと思っています。でも、あなたの父親(母親)は、その旅行は危ないと言って行くのを反対しています。

友人場面：大学の先生から二人一組であるテーマについて調べ、レポートを提出するよという課題が出されました。ところが、あなたとペアを組んだ友人は、「これについてはあなたの方が詳しいから、あなたに全部任せるね」と言って、ほとんどの作業をあなたに押し付けようとしています。

### 質問項目

#### 青年の行動と伝え方

1. あなたはそのとき、どうしますか(行動)。
2. どうしてこの行動を選んだのですか(行動の理由)。
3. そのとき、あなたは自分の気持ちをどのように伝えますか(伝え方)。
4. この伝え方をするのはどうしてですか(伝え方の理由)。

#### 青年の行動に対する相手の反応・相手が青年の行動を拒否した場合の青年の気持ちと行動

5. あなたの行動に対して、親(友人)はどうすると思いますか(相手の反応)。
6. どうしてそういう行動をとると思いますか(相手の反応の理由)。
7. あなたがこのような行動をとったにもかかわらず親(友人)が受け入れてくれなかったとします。

そのときのあなたの気持ちはどのようになると思いますか。どうしてそういう気持ちになりますか  
(相手が拒否した場合の青年の気持ちとその理由)。

8. そのときあなたはどのような行動をとると思いますか。どうしてそういう行動をとりますか(相  
手が拒否した場合の青年の行動とその理由)。

青年が理想とする行動と伝え方

9. そのとき、あなたはどのような行動をとるのが一番よいと思いますか(理想の行動)。

10. どうしてこの行動をよいと思ったのですか(理想の行動の理由)。

11. その行動をとるときに、一番よいと思われる伝え方は何ですか(理想の伝え方)。

12. どうしてこの伝え方をよいと思ったのですか(理想的な伝え方の理由)。

13. 理想的な行動(あるいは伝え方)と実際の行動(あるいは伝え方)がずれている場合は、なぜず  
れているかについて聞く。

<付 記>

面接調査および逐語録作成に協力して下さった皆さんに感謝します。本研究は、日本学術振興会  
科学研究費補助金若手研究(B)「日本的相互協調性の視点から見た青少年のアイデンティティ形成：  
米国青年との比較検討」(2003年～2004年，課題番号：15730296，研究代表者：杉村和美)の助成を  
受けた。本研究の一部は、国際行動発達学会(2006年7月2日～6日，オーストラリア・メルボル  
ン)および日本心理学会第71回大会(2006年11月3日～5日，福岡)で発表された。